

聖地のこどもニュース オリーブの木

No. 16 2005年8月



〈上〉長崎：イスラエル・パレスチナ・日本の高校生
本当に良い友だちになって、共に平和への道を歩もうと決心した

若者たちの心に
平和の種が
豊かに蒔かれました！

（右）広島原爆六十周年
記念式典の朝早く
慰霊碑の前に立つ
イブラヒム神父



NPO 法人 聖地のこどもを支える会

事務局：〒164-0013 東京都中野区弥生町 1-19-1-201

Tel & Fax : 03-3379-5571 e.mail : seichi@k.email.ne.jp

ホームページ : <http://www.ne.jp/asahi/seichi-no-kodomo/org>

プロジェクトが無事終わりました。感謝！

連日の厳しい残暑のなかにもふと秋の気配が感じられる頃となりました。皆様、いかがお過ごしでしょうか。

今回のイスラエル・パレスチナ・日本『平和をつくる子ども交流プロジェクト』にお寄せ下さった皆様の暖かいご支援に対して、心から感謝しております。

おかげさまで、イブラヒム神父を団長とするイスラエル・パレスチナの高校生たちは、7月30日来日以降、日本におけるプロジェクト日程を滞りなく終了して、去る8月12日成田空港から大きな喜びと希望のうちに、全員無事に帰国の途に着きました。

プロジェクト実施以前には、お互いに会うことすらできなかったイスラエルとパレスチナの若者たちが、この機会に初めて出会い、2週間に及ぶ対話と分かち合いの旅を共にしました。その中で友情を育みあい、聖地における紛争解決の困難を乗り越えるためには、互いの違いを認め合いながらも、信頼の中で対話することこそ最善の道であると学んでくれました。また広島・長崎の原爆資料館見学や被爆者の話をとおして戦争の悲惨さ、おろかさを実感し、それぞれがショックを受け、涙を流しました。さらに原爆60周年記念式典への参加、One ピース運動や平和への祈りを込めた灯籠流し、平和の灯火の点火などさまざまな催しへの参加、ホームステイで日本人家庭の体験なども彼らの心に生涯忘れがたい思い出を残し、互いのきずなを深めました。

このプロジェクトを通して蒔かれた友情と信頼の種を将来どのように育てて行くのか、楽しみと同時に責任も感じております。

近くあらためて正式に報告書を作成し、報告会を開催いたします。しかし皆様には、少しでも早くこのプロジェクトの実りをご紹介したく、今回の《オリーブの木》はプロジェクト特集号となりました。以下のページに、それぞれの国の高校生が書き残してくれたレポートあるいは感想文などのほんの一部を掲載いたしました。このプロジェクトを支えて下さいましたすべての皆様に深くお礼を申し上げます。

井上 弘子 スタッフ一同

プロジェクト報告会（予定）

日時：11月3日（祝）

午後14時～16時

会場：JICA 東京国際センター

報告書、映像などをもって、
このプロジェクトの成果、経過、
今後の展望などについてご報告いたします。
詳細は追ってご案内いたします。

【家庭の友】10月号をご覧ください！

～このプロジェクトのすばらしい特集～

平和への渇き 2～15ページ

ご希望の方は、下記へお電話で：

♥ 聖地のこどもを支える会事務局

03-3379-5571

♥ サンパウロ宣教センター

03-3357-6498

「平和をつくる子ども交流プロジェクト」プログラム

	月 日	場 所	プログラム	宿 泊
1	7/29(金)	羽田	午後：エールフランス航空にてテルアビブ出発 パリ経由で東京へ	機内泊
2	7/30(土)	東京	夕刻：成田空港到着 日本人高校生とスタッフ歓迎の出迎え	JICA 東京
3	7/31(日)	東京	イブラヒム神父講演会と歓迎ランチ イスラエル大使の空手道場見学 イスラエル大使館で歓迎ディナー	JICA 東京
4	8/1(月)	東京	「分ち合い」と対話 パレスチナ総代表部の歓迎ランチ ディズニーランドへ	JICA 東京
5	8/2(火)	東京 広島	新幹線で広島へ 広島実行委員会の歓迎を受ける 広島市長表敬訪問 広島司教表敬訪問 「広島の若者との出会いと交流」	八丁堀 シャンテ
6	8/3(水)	広島	平和公園と平和記念資料館見学(グループ別) 「分かち合いと対話」	八丁堀 シャンテ
7	8/4(木)	広島	田舎の生活体験 ワークショップ	共生庵
8	8/5(金)	広島	ワークショップ それぞれホームステイの家族のもとへ 平和行進と平和祈願ミサ	ホーム ステイ
9	8/6(土)	広島	それぞれホームステイの家族と共に式典へ出席 イブラヒム神父式典出席 グループでフィールドワーク 平和灯籠流し	ホーム ステイ
10	8/7(日)	広島 長崎	新幹線と JR 特急かもめで長崎へ 爆心地での献花 長崎大司教様による歓迎会 分かち合いと対話	ウェルティ 長崎 厚生年金会館
11	8/8(月)	長崎	長崎市長表敬訪問 原爆資料館見学 語り部の被爆体験を聴く 全国高校生平和集会 原爆殉難者慰霊祭参加(献花)	ウェルティ 長崎 厚生年金会館
12	8/9(火)	長崎	長崎原爆 60 周年記念式典参加(献花) 「イスラエル・パレスチナの痛みを聴く」 平和の灯火点火式(NHK)	ウェルティ 長崎 厚生年金会館
13	8/10(水)	長崎	各国グループに別れてプロジェクトのまとめと分ちあい 語らいの夕べ「平和への渇き」で平和のメッセージ発信 お別れパーティー	ウェルティ 長崎 厚生年金会館
14	8/11(木)	長崎 東京	自由時間と買い物 長崎から JAL で羽田空港経由成田空港へ	ホテル(成田)
15	8/12(金)	東京	東京自由時間 エールフランス航空夜行便で帰国の途へ パリ経由	機内泊
16	8/13(土)	羽田	午後：テルアビブ着	

プロジェクトに参加して ～高校生たちの感想～

紙面の都合で、高校生の感想文の抜粋を掲載いたしました。

パレスチナのすばらしい友だち

プロジェクトを通し、私個人として多くのものを得ることができた。

この素晴らしいプロジェクトの間に、今まで一度も会う機会がなかったパレスチナの高校生に会うことができ、素晴らしい友達になった。今述べたように、その実りは、第一に、これからの私の生き方に関わるほど価値のある友情関係をつくることができたこと、第二に、世界・日本・そしてパレスチナに関して、一般的な意見とは異なる考え方を抱いて帰国できることにある。

暴力に関して：暴力によって解決できるものは何もない。しかし暴力があるところに必ずしも対話が成り立たないとは言えない。私は暴力がないことを望むが、今日の私の国は暴力の真っ只中にある。ましてやその暴力の中にあっても「対話」は存在し、それこそが、互いの信頼関係を保つために不可欠である。グループ討議でも出たように、戦争になればそこに数々の間違いと悲劇があることを私も知っている。私はそれが止むことを願う。どんな戦争も間違っているのだから、私たちは赦し合わなければならない。

赦しとは：赦しは私にとって、とても大切であり、日常生活の一部である。しかし日本に来て、日本がどのようにアメリカ合衆国を赦したかということを読んで、ただ友達だけを赦すのではなく、敵をも赦さなければならないということを読んだ。

平和の働き手：私たちはまだ若いけれど、平和に渴いている国の一人として、平和の働き手になれると思う。私はまず、イスラエルに存在している数多くの平和活動の1つに参加することから始めよう。友達には、この素晴らしい2週間の体験とそこから得たものすべてを語り伝える。両親には撮った写真を見せながら話すつもりだ。両親はそれを友達に伝えてくれるに違いない・・・

世界の若者への平和メッセージとして、「決して希望を捨てず、あなたの人生の大切なもののために戦い続けてほしい」ということを伝えたい。私は「平和」こそ価値ある大切なものだと思う。世界中の人々に、先ず行動する前にもっと深く考えて欲しいと願う。世界のあちこちで起こっている権力闘争ゲームを止めるために。

友人や家族へのメッセージは、「もっとパレスチナの人々の立場から状況を見つめるべきだ」ということを、そして「イスラエル・パレスチナ紛争から生じた悪い体験を互いに赦すべきだ」ということを伝えたい。

私のこれからの生き方を、そして私の視点を変えさせてくれた体験の場にいられたことをとても幸運に思っている・・・

この素晴らしい計画を立て、私たちが困った時にも親切に温かく接して下さった皆様に感謝しています。皆さんは私たちに最高のものを与えようとして下さいました。困難もありましたが、本当に楽しみました。

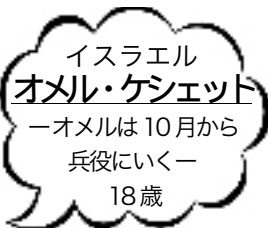
関わってくださったすべての方々に・・・ "Arigato Guzaymas "

Omer Keshet

☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★ ☆ ★

パレスチナ (ベツレヘム)	
<u>マリアン・サアデ</u> 17歳	
イスラエル軍の誤射により、妹は即死、 自分も両親と共に重傷を負った経験を持つ	

・・・日本は素晴らしい国です。日本にいる間中、本当に楽しかったです。このプロジェクトを実現させるために奔走して下さった方々に、高校生たちすべてに、心から感謝しています。正直なところ、プログラムはちょっとハードで



した。でも楽しい、実り豊かな旅でした。日本人とその伝統、文化から多くを学んだのですから。

一番良かったことは、日本、イスラエル両国に多くの友達ができたことです。パレスチナにいる限り、イスラエルの若者に会うことなどありません。

次に広島、長崎の史実をたくさん学べたこと。それは深く心を揺さぶるものでした。日本での体験、特に原爆から学んだことは、「暴力はどんな問題も解決しないこと」「暴力は人間性を壊すだけだということ」「暴力は新たな暴力を生むだけで、決して解決にならないこと」などです。暴力は絶対反対。暴力は人間の害悪です。

もう一つ分かったのは、「日本人が敵を赦したということ」。私個人としては、それが一番大切なことです。集いでも述べたように、「赦すこと」と「忘れること」は区別する必要があります。私を深く傷つけ、私の人生を壊したイスラエルの兵士を一瞬たりとも忘れることはできません。けれども「赦す」ことは、「平和」へ至る一つの道ではないでしょうか。もうあの兵士への憎しみはありません。このことを私は学び取りました・・・



私は、日本からの平和のメッセージを携えてパレスチナの家へ帰ります。イスラエル人の友を得たこと、自分の身に起こったことを語り、分かち合えたことを報告します。平和のメッセージを友人や知人に伝え、その意味を分かってもらえるよう、ベストを尽くします。

幸い、私の両親も同意見で、平和のうちに生きることを心から望んでいます。平和は、暴力や戦争によっては決して到達し得ず、相手方との話し合いによってこそたどり着けるもの。これがとても大切だということ。まことの平和、愛に満ちたより良い未来をつくるためには、平和な手段を用いねばなりません。平和を望むのならば、双方がそれぞれ諦めなければならないものもあり、万事が思い通りにいかないことをも受け入れる覚悟が必要です・・・

ベツレヘムのパレスチナ人

マリアン・サアデ



滝川 理紗

長崎活水高校

16歳

・・・8月2日からの広島で、「one ピース運動」が私にとっての一番の思い出です。平和の象徴である鶴を一生懸命に折り、一緒に歌い、手話をし、誰もが平和を望み同じゴールを目指していることを、初めて分かち合えたときだったでしょう。また共生庵では皆でいっぱいいっぱい好きな事を話したり、歌ったり、川で遊んだり、一緒に寝たり、星を見たり、花火をしたりと友情を深めることができました。そして小さな事から考える平和を学ぶ事ができ、イスラエル・パレスチナの高校生の平和、戦争に対する考え方の深さに圧倒された事を覚えています。

ホームステイでは日本の家族に加わり、優しさや日本の生活方式を学ぶ事ができたと思います。このホームステイで一番印象の深かったのは、マリアンがホストファミリーと私に、妹を亡くした事件を一生懸命話してくれた事です。彼女は泣くのを我慢して一生懸命私たちに伝えてくれました。話をしている彼女を見てみると、私も怒りや悲しみが込みあげてきました。しかしそれ以上に、彼女の気持ち、悲しみを分かってくれたいと思いました。

長崎に入り、たくさんの平和活動に参加しました。最も印象の深いのは9日にイスラエルとパレスチナの高校生が自分たちの体験を話してくれた事です。日本に来て、いつもニコニコ話したりしているのに、国では自分が想像している以上にとても辛い体験をしている事。そして考えられないような日常の生活。私は皆の話を聞いて涙が出てきました。でもこの涙は「同情」ではなかった。「何かを分かりたい。共感したい。」そんな涙だったと思います。

私はこのプロジェクトを通して、「人を信頼しようとする心を持つ事」の大切さを学びま

した。信頼しようとする気持ちがなければ対話しても意味がないと、初めてこのプロジェクトで学びました。そして互いに許しあう事は過去を忘れる事ではない。互いに責任を持つ事。そして相手の事を一步下がって考える事。このプロジェクトを通し、今まで分かっていたように分かっていなかった平和の捉え方を考える事ができました。そして、とにかくイスラエル・パレスチナの高校生に出会えて良かった。そして彼らの考え方の視野の広さなど、本当に言葉では表現できないほど、取得することができました。

このプロジェクトは、今始まったばかりです。本当に私たちの世代からできる事を考えたい。私はこのプロジェクトに参加できて本当に本当に良かった。日本にいながら自分たちのいろいろな事を学べた。本当にこのプロジェクトは私の宝物です。 滝川理紗



小野 美沙紀

長崎純心女子高校

17 歳

・・・イスラエル、パレスチナ両国の高校生の誰もが私よりもすごい経験をしている・・・彼らは決して後ろを向いてはいないということだと思います。どんなに苦しくても、他人にやさしく、思いやりがあって、とてもいい子たち。オメルが、私が落ち込んでいる時、「こんなことで落ち込んでいたらダメだよ。イスラエルでは悲しむことはたくさんある。だから大丈夫だよ」と言ってくれたこと。泣いている私をヤクーブやワルダがなぐさめてくれたこと。

すべて、彼らだから出来たことだと思います。本当は今日でお別れなんてしたくない。でも、絶対いつか会いに行きます！ それまでは、メールなどで連絡したいなと思います。

メールでは手はつなげないけど、心はつなげるから・・・

小野美沙紀



・・・僕が一番信頼について感じさせられたのは、Bahjat との出来事でした。8月11日、皆で動く最後の日、さよならパーティーも前の晩に終え、今日は最後に観光をして終わるのかなと思っていた朝のことでした。僕が朝食から帰ってきた時、彼は荷造りをして

いました。



その彼が部屋に入ってきた僕に、パレスチナの国旗を “It's present for you!” と言って贈ってくれたのでした。そのときはまだ「国旗を渡される」意味、その大きさが分かりませんでした。国旗にメッセージを書いてくれないかと、軽率なことまで言ってしまいました。

国旗を渡されるその意味の大きさについて感じ始めたのは、バスの中での濱ちゃんとの会話、そして羽田空港で別れるときでした。羽田空港で別れるとき、彼の体が震えているのを感じました。そして僕が、国旗を贈ってくれたことにありがとうと言うと、“Keep the flag, OK?” と、念を押すように言っていました。その時、国旗を渡す、贈る意味の大きさをとても強く感じました。Bahjat からの国旗は今、家に大切に保管しています・・・

酒見 道



この旅で気づかされたことは、出会い、信頼、対話することの大切さだった。ヴァーチャルではなく、リアルで会い、お互いのその時間などを共有することで生まれる本当の信頼関係。その信頼関係があるからこそ出来る対話。そして対話から生まれる相互理解。そのプロセスがあったからこそ、私たちは分かち合うことが出来たのではないだろうか・・・

このプロジェクトは、これからの私たちの第一歩にすぎないと思う。今回のコトをバネにして、私たちは、これからの道を選択していくのだ・・・

甲斐 友香里

酒見 道

栄光学園高校

16 歳

甲斐友香里

松戸市立松戸高校

16 歳

石黒 朝香

不二聖心女子学院高校

17 歳

・・・何よりも感動したのは、彼らの心の広さと強さでした。旅の途中で、私も含めた日本人高校生は何度か体の調子を崩し、スケジュールに参加できないこともありましたが、その度に心配してくれたり、荷物を持ってくれたり、本当に親切にしてくれました。8月9日の午後に、イスラエル・パレスチナの状況について

一人ずつ経験を話してくれたことも、私にとってものすごい衝撃でした。みんな、相手側の国の人がいるのに、冷静に落ち着いて、かつ、自分の心情をはっきりと話してくれました。本当は辛くて仕方がないのに、旅の中ではそんな様子を少しも見せず、逆に、話を聞いて泣いていた私を励ましてくれました。本当は私たちが励ましてあげなければならなかったのに、どうしてこんなに優しいのだらうと思い、また涙が出ました。

今回の参加者の皆さんは、あれだけ聖地の平和を願って、相手の国を受け入れ、時には自国の行いについて反省しているのに、大切な人を失ったり、耐え難い恐怖を味わいながら、生活しなければならないところに住んでいるということが、すごくショックでした。「人を傷つけよう」などと微塵も思っていないのに、何のために彼らが傷つけられなければならないのか、どう考えても理解できませんでした。いつ死ぬか分からない毎日を過ごすことは、一体どんな気持ちなんだろうと想像しても、平和に浸っている私には全く見当もつきません。なぜこのような悲痛な叫びが政府には届かないのか、戦争をすることで得るものは本当の利益なのだろうか、戦争に対するたくさんの根本的な疑問が湧いてきました・・・

石黒 朝香



・・・私はこのプロジェクトを通してさまざまなことを学ぶことができました。その一つが「家族の大切さ」です。・・・「すべての家族、世界中の家族がバラバラになり、誰かの命が危ない時に家族は幸せでなくなり、世界は平和でなくなる」と思うのです。この2週間、私たちは本物の家族のように過ごしてきました・・・ケシエツトが言っていました。「私は友だちや家族を失いたくない」と。目と目を合わせ、対話することによって友情が生まれ、それこそが、戦争のストッパーとなり、平和の種になるということ、学ぶことができました・・・

緒形 葉子

広島市立基町高校

15 歳

緒形 葉子



・・・ところで、この旅で得たものを、これからどうやって活かしていけばいいのでしょうか。平和というのは一つの視点から語れるものではありません・・・

「平和」の実現にアプローチする方法も、同じように人それぞれです。そんな状況の中、私が平和のために具体的にできる活動は何かといわれたら、自分にできること、自分だからできることを模索して、そこで自分にできるベストを尽くすことだと思います。世界中の人が、自分だからできることを通して、平和に近づく努力をすれば、多方面から平和の実現に近づくことができるのではないのでしょうか。

横山 雄一

広島学院高校

16 歳



最後になりましたが、私達にこんなに素晴らしい体験をさせてくださったすべての方々に、心よりお礼申し上げます。プロジェクトの大切さを信じて心温まるご支援、ご協力をくださった皆様方の中には、感謝の言葉もありません。プロジェクトに参加した者それぞれが、小さな平和の種を持ち帰りました。その種がいつの日か実を結ぶように、大事に育てていきたいと思えます。本当にありがとうございました。

フォトアルバム



〈上〉 8/10 長崎：お揃いのTシャツで、こぼれるような笑顔！



8/9 長崎の原爆60周年式典で献花した
イスラエル/パレスチナの4人
左からトム、パハジャット、オメル、ハテム



8/10 長崎「語らいの夕べ」—平和への渇き—で平和を歌う若者たち
〈上〉 パレスチナ 〈下〉 イスラエル



〈上〉 8/9 長崎：NHKの生中継でインタビューされる
イブラヒム神父と高校生たち



〈左〉 楽しい仲間たち
ちょっといたずら！

〈右〉 8/4 共生庵：作業衣姿のイブラヒム神父と
お茶を楽しむマリアンとワルタ



楽しかった2週間、イスラエルもパレスチナも日本も
みんな仲の良い友だちになりました。
笑いも、涙も、感動も、緊張も、疲れもありました。
でも「平和への思い」は一つ、これから手を携えて進んでいきます。